第一〇回　丸山眞男記念比較思想研究センター公開研究会

都築勉『おのがデモンに聞け』合評会　討論記録

都築勉　都築勉と申します。本日はこのように貴重な勉強の機会を与えて下さいまして、どうもありがとうございます。心から感謝申し上げます。とりわけ西洋政治思想史、現代日本政治、日本政治外交史、そして日本政治思想史の各分野において常に研究の第一線に立って来られた先生方から御批評を賜りますことは、私は博士論文を書いておりませんし、ともすると住所不定の傾向がありますので、遠い日の修士論文の審査以来の出来事で、まことに恐ろしく、しかし大きな喜びであります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

今回の本はもう出てしまいましたので、いわば自供してしまったようなもので、もはや弁解の余地はありません。そこで、以下、そもそもの執筆の動機を申し上げ、今回の本に登場する政治学のランナーたちのバトンタッチの場面について短く述べ、そしてみなさまからいただいた御批評、御質問にお答えしたいと思います。なお、私の能力と時間の関係で、すべてにお答えすることはできないかもしれませんので、むずかしい御質問については後半の議論の中でみなさまのお力を借りて認識を深めたいと存じます。

刊行直後からいただいた最も多くの御指摘は、なぜこの五人なのかということでありました。日本の政治学の歴史を考えるときに、少なくともこの五人の名前が挙がることには問題がないと思います。問題は私に論ずる資格があるのか、もし論ずるなら、どのような観点から論ずるのかということであります。私は何をしようとしたのか。

かつて東京大学に籍を置いた政治学者たちに対象を限定しましたのは、一種の定点観測を試みる中で、学問分野の充実と時代の変化と世代交代の様子を見るためであります。原稿を執筆したのは二〇一九年の三月から六月にかけてでありましたが、実はそれに先立って、まったく別の案件で、私は政治学者の高畠通敏について、今回の五人の政治学者のそれぞれとほぼ同じ分量の文章を書きました。これはまだ発表されず、刊行の見通しも危ういものですが、そこで私は高畠を、文明論を伴った政治学者の最終ランナーとして位置付けました。そのことについては今回の本の最後の三六七頁でもわずかに触れています。高畠ももちろん東大政治学の有力な後継者と目された人ですが、その生涯は猛烈なアンチ東大意識によって貫かれていました。今回の五人

に加えて、もちろんほかにも論ずべき人がいるにしても、六人目に高畠を置く、あるいはいっそのこと将来いまだ未発表の高畠論を最後にくっつけると、見える景色が少し違って来るかもしれないと思っています。

今回の本の執筆に当たって私が最も意識したことは、二〇世紀の日本における大学と新聞・雑誌、アカデミズムとジャーナリズムの同時並行的な発達ということであります。これは一九世紀的な現象でも二一世紀的な現象でもなく、二度の世界戦争を間に挟んだまさに二〇世紀的な出来事であります。よくアカデミズムかジャーナリズムかというように、二者択一の形で知識人の活動の場が論ぜられることがありますが、この二つは、とりわけ大学の起源が中世にあるヨーロッパと異なって日本では、二〇世紀の時代精神が生み育てた双子の兄弟であります。このことは、両者にともに活動の場を置く知識人はもとより、もっぱら大学に籠るタイプの研究者にとっても、あるいはジャーナリズムを主戦場とする執筆者にとっても、もう片方の世界が常に意識されていたということです。一方に対する禁欲は決して無関心ではありません。

以上のような状況は、二一世紀の今日、大きく変わりました。はっきり申し上げて、新聞も大学も、二〇世紀のままでは、もはや衰退産業です。新聞・雑誌の発行部数はこの二〇年間に大幅に減少しました。大学は数こそ増えていますが、もはや昔日の大学ではありません。そして大学の発達と新聞の発達の間には明らかに密接な関連がありました。今日の大学では、筆一本で立つ新聞人を育てることは困難です。新聞人は各社ともサラリーマン化しています。ちなみにかつて『政治家の日本語』という本を書いたことがあるためか、ときに私に政治家の言葉遣いについて尋ねて下さる新聞の方がいらっしゃいます。政治部や社会部と学芸部の違いもあるでしょうが、私が今回の本のような勉強をしていることはおそらく御存じないと思います。まちがっていたら、ごめんなさい。

大学に目を移しますと、学生は教科書を別にすると、研究者でもある教師が書いたものを読みません。なお、情報革命により、オンラインで授業が聞けるならば、どうして大学ごとに受講生を限定する必要があるのでしょうか。聞いてもわからないかもしれないけど、科目ごとに安価な料金で、ショパン・コンクールではありませんが、誰でもどこでも聞けるような日が遠からず来ると私は信じます。反面において大学は、リアルなキャンパスが持つ意味を再発見する必要があると思います。

今回の本のもう一つの執筆動機は、いわゆる政治原論的な著作の系譜をたどることです。これは一九〇三年刊行の小野塚喜平次の『政治学大綱』が切り開いた道です。『政治学大綱』は政治学の教科書という側面も持ち合わせていますが、そもそもは政治の原理的認識をめざした書物です。したがって福沢諭吉や中江兆民らの多くの著作とは性格が異なります。小野塚と同時代の夏目漱石で言えば、一九〇七年刊行の『文学論』に匹敵します。そうした政治の原理的認識をめざした研

究は、その後二〇世紀を通じていかに蓄積されたか。戦後になって、一九五二年の丸山眞男の『政治の世界』や一九七一年の岡義達の『政治』のような独創的な作品が生み出されましたが、そうした政治認識のモデル構築の試みは今日いかなる状況にあるか。佐々木毅先生が二〇〇一年に『公共哲学』の二にお書きになった「政治学の観点から見た公私問題」は大変興味深いものですが、遺憾ながら短いのです。事柄の性質上、そのような政治の原理的認識もしくは基本的な政治観の形成は、自前の手作りの学問の構築を要請します。自分の内なるデモンの声に耳を傾けるときですが、言うまでもなくそこにはひとりよがり、もしくは独断と偏見に陥る危険が常にあります。

今回の本の中の三〇四頁でも触れましたように、京極純一は、人を政治学の研究活動へと導くものは「好奇心、知的関心」と「人間関係へのいわば女性的な関心、保育し配慮する行動へのドライブ」だと言いました。今日では問題発言かもしれませんが、人間関係への関心を挙げている点で、京極においても政治学は単なる謎解き、パズル解きではありませんでした。高畠通敏は、政治学者は「挫折した政治人」であると看破しました。プラトンやマキアヴェリがそうであったようにです。人生における、特に青年期の挫折の経験が、どうして現実はこうなのかという切実な問題意識を育むのです。

今日では、おのがデモンに聞いているようでは、科研費の審査に通りません。そして獲得した外部資金の多寡が研究者本人と所属する学部及び大学を評価する基準になっています。大学間のみならず、それぞれの大学の学部間にも獲得額を巡る競争があります。もちろん丸山眞男が強調したように、学問には学問の型があります。しかし科研費の申請には「傾向と対策」があるように思います。お金なんかいらないし、結果がどうなるかもわからないけど、一人でどうしても気になることにしがみつくというタイプには不向きであることは確かです。しかも感染症対策に明らかなように、何が役に立つ学問かは事前には誰にもわかりません。だからこそ広汎な人々の多様な問題関心を伸ばす必要があるのです。それなのに、いまの状況では落ち着いて学問をする喜びを味わえないではないかというのが、私に今回の本を書かせたもう一つの動機です。

今回取り上げた五人の人々は、それぞれまったく違うタイプの政治学者でした。日本で最初の政治学者である小野塚喜平次と二人目の吉野作造は、大正から昭和にかけての同じ時代の日本の現実を見ていながら、主たる著作の発表の場や想定された読者層がまったく異なっていました。三人目の南原繁も実証的とされる師の小野塚の学風とはまったく異なって、内務官僚の出身でありながら、どんどん哲学の世界にはまって行きました。しかし「政治学に先生はない」と言った南原は、敗戦の直前に亡くなった小野塚への弔辞で、「先生」と呼びかけています。「小野塚先生」ではありません。南原にとって、「先生」はこの人しかいなかったことを思わせます。信仰上の師にはもちろん内村鑑三がいましたが。

南原と丸山の関係も注目されます。国民共同体論の南原は典型的な

コミュニタリアンで、丸山はリベラルです。絵に描いたような対立です。南原が信仰の人であったのに対して、丸山はマルクス主義の影響下に青年期を送った人でした。南原の政治が何よりも正義の実現であり、アレントやウォーリンやクリックの政治観に近いのに対して、丸山の政治は紛争を解決するための権力の行使であり、「悪さ加減の選択」に過ぎないもので、明らかにウェーバーを下敷きにしています。南原が晩年まで「政治哲学」を看板に掲げたのに対して、丸山は「政治思想史」もしくは「思想史」という分野の開拓者でした。これほど異なる二人が深い師弟関係で結ばれていたことは驚くべきことです。ちなみに南原は軍隊生活や闘病生活や大学紛争で窮地に陥った丸山に何度も救いの手を差し伸べています。

同じようなことは、丸山と京極の関係についても、京極と高畠の関係についても言えます。我が身を顧みず、まことに恐れ多いことながら、学問の世界の醍醐味を感じさせる事柄の一端に触れさせていただきました。

以下、御質問にお答えします。

千葉先生からはいち早く御懇切、御丁寧なレジュメをいただきました。最初の御質問は、明治時代のいわゆる七博士事件及び戸水事件を例にとって、都築の言う大学人がするべきでないことというのは何かということであります。むずかしい問題であり、かつ多様な考え方があってよいと思います。いわば修道院というか、お寺に入るわけですから、町との間を自由に行ったり来たりしてよいかということであります。今風に表現すれば、大学という場所あるいは大学人という地位を楯にしてものを言うべきではないと私は思っています。ものを言うなら、他の職業人の場合と同じく、一人の職業人としてか、もしくは市民としてではないかと思います。

次は天皇機関説事件への小野塚の対応如何であります。小野塚は美濃部が貴族院で弁明を試みたとき、議場にいて拍手をした少数の議員の一人だったようですが、それ以上のことは何もできませんでした。大学の受難の時代を象徴する出来事です。最初の御質問に対するお答えとは反対に、大学人は総力を挙げて大学という場所を守るべきですが、もちろん政治的圧力と社会的圧力を前にすると、ことはいつの時代も容易ではありません。

三つ目と四つ目の御質問というか御指摘のキリスト教と政治学の関係について、丸山眞男が『話文集』の続編の二で、クリスチャンには二つのタイプがあり、信仰と学問的立場を不可分と考える人の代表が宮田光男先生で、大塚、矢内原も同様で、峻別するのが京極先生だという指摘をしていることを思い出しました。京極先生が峻別論かどうかはわかりませんが、南原はどうなのでしょう。しかし以前に同志社大学の岡野八代先生から、宮田先生は私財を投じて学生寮の運営をしておられるという話を聞いたことがあります。宮田先生が長く奉職された東北大学が、かつて吉野作造が洗礼を受けた仙台にあるということもあって、私はそうか、吉野もそういう人だったのかと腑に落ちた次第です。政治活動の前にというか、あるいは少なくともそれと並ん

で、社会活動があるかと。

なお、千葉先生にお目にかかれたこの機会にぜひお教えを乞いたいことは、南原のいわゆる価値並行論で真・善・美と並んで政治的価値としての正義が出て来るのは、南原の宗教観に基づいているのでしょうか。宗教はこれらの文化価値のすべてを下支えしているという南原の記述もありますが、宗教から直接正義が出て来ると、のっぴきならない事態になるようにも思うのですが、どう考えたらよいでしょうか。

ここからは本日この場で伺った御指摘に関わるものなので、言葉足らずの応答になることをお許し下さい。

日本政治外交史が御専門で吉野の時代を知悉しておられる伏見先生からは、吉野の日本政治史並びに小野塚の代講として行われた政治学の位置付けについて、鋭い問題提起をいただきました。本の中にも書きましたように、私はそもそも吉野がその生涯の後半期に取り組んだとされる日本政治史研究の輪郭さえ、つかみかねている始末です。吉野の後任である岡義武の戦後に公刊される日本政治史研究との関係も把握できていません。一方、吉野の政治学ないしは政治観について、「社会学的認識がない」という蠟山政道の指摘もあります。この点で、蠟山がいう同時代の政治学の「実証学派」あるいは「社会学派」との違いがあると思われますが、いかがでしょうか。

本日の伏見先生のお話を伺っていて、少し補足させていただきます。松本三之介先生や飯田泰三先生が吉野の再評価を行ったのに対して、都築はそれ以前の枠組みに捕われているという御指摘だったと思います。確かに私は若い頃は丸山の影響が強かったので、大正デモクラシーには何も見るべきものはないと思っていました（いまの学生が丸山を知らないのと少し似ているかもしれません）。いま頃になって、なるほど吉野は時代の中にあって大きな戦いを成し遂げたのだと思っています。しかし、依然として私の中には、吉野は非マルクス主義的で、戦後の日本の中で言うとかつての民社党的な立場に近く、しかもその政治論は結局のところ普通選挙や議院内閣制の成立に収斂するようなものなので、そういう意味では政局論と言っては語弊があるかもしれませんが、狭い意味の政治論に集中している観があります。その反面、今日の諸先生のお話の中にも出て来ましたように、吉野の人間観はやはり性善説的と言いますか、人を信頼してやむところがない姿勢があるように思いますので、そういう意味では悪を成す人間を前提に政治認識を展開するという面においては弱かったのではないかと改めて思いました。

谷口先生には総選挙の投開票まであと一週間のお忙しいときにお目にかかれて光栄です。今や谷口先生の開発された計量分析の手法は、今回の総選挙に当たって各メディア、とりわけ日本テレビやＮＨＫが視聴者に向けて候補者と有権者の政策距離を簡易的に測れる仕組みとして普及し始めたように思います。谷口先生の御著書である『現代日本の代表制民主政治』は、その手法については私の理解を超えるのですが、私にもともかく最後まで読めた計量分析の数少ない文献です。この筆のお力でぜひ政治原論的な考察を著していただきたいと切に希

望しております。さきほど谷口先生は御自身を「分家の分家」とおっしゃいましたが、今回の五人の政治学者を見ますと、まさに「分家の分家」の開拓をつなぐことで、日本の政治学の伝統は形成されたと思うからです。

千葉眞　都築先生、どうもありがとうございます。「質問1」についても本当に多様性がそこでは重要であるということですね。それから、五人の政治学者たちがそれぞれ置かれた状況や個人史的なことにも大きく影響されるというインプリケーションもあったと思います。もう一つその点では、市民としてという言葉がありましたが、学者として上から目線ではなくて、市民の一人としての参与というインプリケーションですね。これもありがとうございました。

「質問2」は私自身の疑問点として、小野塚が天皇機関説の問題について表立った行動や言論をされたのかという問いです。これに対して、議会の中で美濃部の弁論に対して拍手をしたということですね。ですからやはり大学を守るという立場から、それがせいぜいやれる限界だったであろうというご指摘で、よく分かりましたし、当時としてはまったくそうせざるを得なかったのだろうと思いました。

三番目、四番目の問いに対しては、クリスチャンに二つのタイプがあると丸山先生がおっしゃっていたということに興味を覚えました。宮田光雄先生の場合にはむしろ外にも信仰の立場を表明していくタイプであり、それはたとえば矢内原忠雄や大塚久雄についてもそうであろうというご指摘はよく理解できました。京極先生の場合にはそれが間接的に、うしろに控えた形でキリスト教というものがあったのではないかということも本当によく分かると思いますし、現代のキリスト教の背景をもった社会科学者あるいは思想系の人たちに関しても、これら二つのタイプがあると言えるのではないかと思いました。ですが同時に、今日では研究者の信条と社会科学的認識との峻別ということが、ますます厳しく問われることになっています。それが現代の大前提でして、宮田先生の場合も、両者の峻別は当然なされているわけです。最終的にご自身の規範的な立場を出される時に、研究者の主体的な価値判断（宗教者の場合には信仰的価値判断も含めて）がそこに加わることはあり得ると思います。それは信仰の有無にかかわらず、イデオロギーの違いにかかわらず、すべての研究者についてそう言えるでしょう。また、上述の二つの分類から言えば、おそらく吉野の場合は最初のタイプ、顕在化させるというと言い過ぎですが、社会科学的価値判断の背後に信仰的価値判断がどっしりと控えていたタイプと理解してよろしいのではないかと思いました。

それからもう一つ、南原の価値並行論でありますけれども、おそらくキリスト教から直接間接に出てくるのは、正義ももちろんあるのですけれども、愛も際立っているのではないかと思います。「生々の生命」と言う場合にいつも正義と平和という言葉が出てくるのですけれども、同時にまた愛も出て来るのですね。「愛の共同体」という概念は、南原の思想の中心にあったと思います。信仰においては垂直的な超越者との愛の関係が重要であり、水平的には愛の共同性が大事であって

一般的な意味での隣人愛や友愛の強調が見られると思います。正義がどこから来るのかということに関しては、一つは儒教の「政は正なり」ですね。丸山先生が、「政は正なり」や「政治とは文化の創造である」という南原の発言に非常に衝撃を受けて、「何という戯言か」と直感的に反応したということがありました。南原の場合、正義は一つには儒教から来ているのではないかと思います。それからもう一つは、正義は、キリスト教の義ないし正義の理念、さらにそれと無関係ではなでしょうけれども、カント、フィヒテからやはり来ているだろうと思います。そうした法的な背景をもった正義論という形で、マルクス主義あるいは構造的暴力論に見られるような社会的正義の追求という面もありましたでしょうけれども、規範的な正義という含意が強いのではないかと考えています。

伏見岳人　名前が挙がりました蠟山政道もたくさん研究が出ている人です。一九一九年の吉野の政治学講義に関して、ちょっと失敗だったのではないかという回想をして有名なのは、蠟山の感想です。社会の実態を捉えられていないと批判し、吉野とは違う形で自分の学問を作ろうと、かなり意図的にされたので、よく対比される二人という気がします。他方で、その社会の認識のズレや違いを背景にして、対外認識において、特に三〇年代の日本が領域を伸ばしていく過程において、吉野と蠟山はかなり違った軌跡をとっていくことになります。政治の認識を見るときに、やはり対外関係を含めて考えないと、近代日本の政治学者を捉える上で難しいとあらためて感じました。

もう一点、丸山との関係如何ということですが、都築先生のご理解ですと、戦前と切り離されて丸山の知的系譜があるというご意見なのかなと拝察しています。それゆえに、吉野のことも評価が低かったというご理解だと思ったのですが、他方で日本政治外交史の分野からすると、三谷太一郎先生の学説が強い影響力をもっていることもあり、吉野のような知的蓄積が戦後の丸山につながっていったと、その連続性をかなり強く見ようとする学問体系があります。そのあたりをどのようにご覧になられるか、ディスカッションの場で議論させていただければと思いました。

都築　いまの伏見先生の点ですが、私は三谷先生とは少し違う認識を持っています。三谷先生は大正デモクラシーと戦後民主主義、人物で言えば吉野と丸山の連続性を指摘しておられますが、私はずっと連続よりは断絶に注目していました。一言で言えば丸山たち戦後知識人の多くは理論的にマルクス主義をくぐっているということです。しかしそのことは別にして、昭和戦前期という時代の制約の中で吉野が行った活動の意義を私の中で再発見したのは最近のことで、それは明治の小野塚についても言えます。むしろ丸山に対して、小野塚、吉野も捨てたものではないと言いたいというのが、今回の本を書いた動機の一つであります。

谷口将紀　本日は皆様の御話を伺いまして、たとえばアカデミズムとジャーナリズムの関係、あるいは政治学者が政治にものを言うときの原理原則など、都築先生はどのような問題意識でこの御本を書かれ

たのかをより深く理解することができました。また拙著に対しても過分のお言葉を頂戴しましてありがとうございました。

渡辺浩　もう私からお話しするようなことはあまりないように思いますので、一点だけ補足的に発言したいと思います。政治学、あるいは日本の政治学史にあまりお詳しくない方が疑問に思われるのではないかという点についての補足です。先ほど谷口さんから、「分家の分家」とか、「こうもりだ」とか、やや拗ねたようなご発言がありましたけれども、また、そのこととおそらく関連するのですけれども、都築さんのこのご本の八三頁で、堀豊彦教授――戦後すぐの時代の東大法学部の政治原論の担当者――の定年である一九五九年までの講義に触れて、「当時の東京大学の学生たちは……戦後の日本政治について何も学んでいなかったのではなかろうかと思ってしまう」という指摘があります。何も学んでいなかったというのはたぶん違って、行政学では当時の具体的なことについても教えていたと思うのですけれども、ただ、その状況は私が東大法学部に進学した六七年――私はそれで六九年の卒業ですが――でもほぼ同じです。政治学史で西洋の古典古代以来の政治哲学・政治理論を学ぶ、あと西洋の政治史・外交史、そして日本については幕末以来の戦前までの日本政治外交史を学ぶ。それらを学んでいれば、現代日本の政治は新聞を読めば分かる。つまり「本来の」政治のありようと日本の政治史とを学べば、それを応用して現代日本政治については理解し、議論できるという、たぶんそういう感覚だったと思うのです。その感覚がかなり一般的だったことの証拠として、大嶽秀夫さんが『日本政治研究事始め』という本を今年八月に刊行されましたけれども（ナカニシヤ出版）、その中でストックウィンさん――つまり西洋人――の『日本社会党と中立外交』（一九六九年）という本を読んで、日本政治を素材にこういうアカデミックな分析ができるのだということに気づいてショッキングだったと書いておられるのですね。つまり大嶽さんにとっても、現代日本政治をアカデミックにきちっと研究することがありうるということが発見だった。アカデミックな教育とは、そういうことができる基礎を作るものなのだ――おそらくこういう感覚だったと思うのです。

そして、私の学部卒業後の七一年に京極先生が異動してこられて現代日本政治について話をはじめられたので、本当に私も現代日本政治について、どういう仕組みでどう動いているのかは基本的に知らないままに学部を卒業した。実はそういうものだったのですね。それは、西洋の学問と西洋の政治を模範として日本のことを考えるという傾向が強かったというのが一因ですし、もう一つには戦前、直接に日本の政治を学問的に扱うことには非常に困難があった、授業ではできなかったという事情があった。そういった事情がいくつか重なってそういう特異な伝統ができた。そういうことだと思うのです。目の前にあるこの国の政治の分析から政治学がはじまったのではないという特質が、この『おのがデモンに聞け』という本で対象とされている方々にもあらわれているということだろうと思います。

千葉　都築先生のご本の中で、戦前戦中の政治学の状況と戦後の状

況が、敗戦をはさんでいますから当然ですけれども、ガラッと変わって、丸山眞男の政治学が一つのパラダイム転換としてその後の戦後政治学の一つの流れを作っていったというご指摘がありました。私も不勉強ながらそのようにずっと理解してきたのですが、こうした理解が、たとえば私などよりも20年、30年ほど若い世代の政治学者たちにも、東大系の方々も含めて、ここでは谷口先生と伏見先生にお聞きしたいのですけれども、今でも共有されているのかどうかということがちょっと気になりました。

それともう一つ、南原繁の立ち位置というか評価なのですけれども、私は多くの東大で政治学を学ばれた方々で、私とだいたい同世代から少し上の人たちの間で評価が分かれていると思ったのです。南原繁はやはり丸山が非常に重視し、ずいぶん学風も違い、政治学の内実についてはかなり違った考え方をしていたのですけれども、やはり深いところでかなりの影響を受けているのだという考え方を表明されていた先生方がおられました。

それからもう一つの違った意見があって、丸山先生への南原先生の影響はそれほどなかったと自分は思っているという方々もおられました。これらの先生方は、丸山先生には個人的にもいろいろな親しい交流があり、影響を受けた南原先生に対する深い敬意があったけれども、学問的には南原先生が丸山先生に与えた影響はほとんどなかったのではないかという意見の方も何人かおられたように思います。またこれは南原先生のご家族の方々から聞いたことですけれども、丸山先生が来ると聞いて、そのような時には南原先生はすごく喜んで、いつもまだかまだかという感じで待っていたということでした。そして話は非常に長くなり、丸山先生が、もうずいぶん長くなりましたからと立ち去ろうとすると、もうちょっといいじゃないかというというようなことが度々あったと聞いておりました。

南原先生と丸山先生の間の学問的な影響関係について、身近で見ておられた渡辺先生や都築先生はそのあたりどのようにお考えなのか。そのあたりどうだったのかということをお伺いしたいと思います。

谷口　一点目は私へのご質問であったと思いますが、音声が途切れてしまって肝心なところを聞き取れませんでした。申し訳ありませんがもう一回お願いいたします。

千葉　丸山政治学が戦後の政治学のパラダイム転換として一つの流れを作った――それはすべてではないけれども――という見解がやはり都築先生の本書でも示されていますし、私もそのように見る傾向が強いです。けれども、それが果たして、私はすでに七〇歳を少しこえたばかりですけれども、若い世代の方々にとってもそうなのかどうか。もちろん、さまざまな政治学的手法が、行動科学的な政治学や実証研究を含めて、いろいろと出てきましたし、専門化・細分化がずいぶん進んできました。ですので、多様化が進んできた中でどう考えたらよいのか。規範的な政治学――政治哲学や政治思想史や政治理論――の方ではそうかもしれないけれども、全体から見ればもうそういう時代ではないということなのか、そのあたりを伺いたかったということで

す。

谷口　二〇年以上前、恐らく日本政治学会の五〇周年記念シンポジウムではなかったかと思いますが、アメリカ政治学会を模して、最も影響を受けた日本の政治学者の投票があり、一位が丸山眞男先生で、僅差の二位が三宅一郎先生でした。それからもう二〇年以上経ちましたから、今は東大出身の政治学者の中でも、学生のときに『現代政治の思想と行動』を読んで腰を抜かしたという経験を共有しておられる方は、それほど多くはないと思います。東大法学部で丸山に言及する講義もどれぐらいあるでしょうか。一方の三宅先生についても、大著の『異なるレベルの選挙における投票行動の研究』を持っている人は、計量政治学をやっている方でも多くなさそうです。その意味では、学界の共通了解とでも言うのでしょうか、政治学者はみんな読んでいるといった、古典のようなもの自体が今はなくなってきている、という印象を受けます。自然科学では本はほとんど読まれず、論文も五年経ったらお蔵入り、などと言われています。そこまで極端なことにはならなくても、政治学も専門分化と並んで、特に計量・実証系ではそちらの方向に近づいている印象を受けております。もちろん良し悪しは別ですが。

千葉　ありがとうございます。

都築　戦後の東大では日本研究がなかなか認められなかったというお話を伺いましたが、いまの千葉先生のお話でもそうですけれども、丸山パラダイムというのは日本研究なのだと、京極先生もそうおっしゃっておられましたし、私もそのように思っていました。たとえば天皇制ファシズムの研究というのが戦後に数多く出ました。必ずしも政治学だけではなくて、文学系統も社会学系統も、もちろんマルクス主義のものもありました。政治学に限って見ればその意味での日本研究は、私が最初に高畠さんのことを言ったときに使った言葉ですが、文明論的分析なのですね。そういう意味では文学的、あるいは印象記述的なのかもしれませんが、ルース・ベネディクト（それ以前からあります）以来の日本論に乗った形での日本研究と言いますか、特に戦争の問題やファシズムの問題の解明がずっと行われていました。ですから、そのような日本研究は戦後非常に盛んになったと私は理解しています。私が一九七四年に大学に入ったとき、政治学だけでなく社会諸科学の中で挙げられる参考文献の多くはファシズム論でした。もちろんエーリッヒ・フロム等の海外の文献もありましたが、ファシズム研究が多くの先生方に共通の参考文献リストでした。八二年に私は立教大学のティーチング・アシスタントになったのですが、そこで高畠先生や栗原彬先生と読んだのは、その年に出た藤田省三さんの『精神史的考察』や鶴見俊輔さんの『戦時期日本の精神史』でした。政治学のゼミでそういうものを読むというのはそのときまでは当たり前だったのです。さきほど谷口先生がおっしゃっておられたように、日本研究の中身として自民党研究をやるというようなことは―もちろん圧力団体や利益集団の研究は一九五〇年代末からあったと思いますが―、早くは福井治弘さんの『自由民主党と政策決定』（一九六九年）とか、

なかんずく一九八六年の佐藤誠三郎さんと松崎哲久さんの『自民党政権』が画期だったと思います。大嶽先生のお仕事はまさにそういう中から出て来たと理解しています。したがって、日本研究というのは、私は講座派マルクス主義以来の伝統だと思うのですが、日本社会の特殊性の指摘のような日本研究はずっとあったので、そういうものと切断されて、日本の政策決定過程が多元主義的かどうかといういわば普遍主義的な観点から分析されるようになるのは、特に一九八〇年代以後のことだと思います。

山辺春彦　ありがとうございました。千葉先生から出していただきました二点目の、南原の捉え方につきましてはいかがでしょうか。

渡辺　わりあい近年になって南原研究というものがいろいろなされるようになりましたけれども、では現在日本の大学で西洋の政治思想史を講義する場合に、南原繁『政治理論史』が参考文献としてあげられるかというと、あまりあがらないのではないかと思うのです。また現在、西洋政治思想を研究しておられる方が必読文献と思っておられるかどうかも疑わしい。また南原政治哲学を、さまざまな政治哲学を議論しておられる方が、それこそロールズやら何やらと並べて読むかというと、やっぱり読まないのではないかと思うのです。南原の研究は独自の地位を占めていて、そういう意味では切れていると思います。ただ、丸山先生に対しては、それは深甚なる影響があったと私は思います。いろいろな点で対照的ではありますけれども、非常に深いところで影響を受けており、また心の底から尊敬しておられた。それはまったく無批判だということではないけれども…。私は丸山先生に直接さんざん接しましたけれども、南原先生についての話を聞かされることも多々ありました。

ついでに関連して発言してよろしいでしょうか。さきほど都築さんからご指摘のあった、ある意味で日本政治論みたいなものはずっとあるのだというのはおっしゃる通りだと思うのですが、ああいった日本人論・日本文化論に近いような日本政治文化論のようなもの――京極さんの『日本の政治』もその一例だと思いますけれども、あれは急速に古くなってしまったという感じがするのです。『日本の政治』をいま読んで、「第五章　親心の政治」とかを読んで、「なるほどな」といまの学生は思うでしょうか。実は私が『日本の政治』を刊行時に読んだ時にも、「何かこれ、昔の話のようだ」という印象でした。地方出身というのが、ここは不利に働いた例ではないかと思います。かなり古い日本が、京極先生の中では「あれが日本だ」という原イメージとしてあって、それを整理して述べられた。現に『日本の政治』がベストセラーになったことが何度か『おのがデモンに聞け』でも指摘されていますけれども、あの本はロングセラーになっていないのではないか。いまの日本の政治を論ずる時に、参考文献にあげられるかというと、あげられない。私は引用された例を知らないです。だからそこはちょっと注意すべきところだと思います。

ついでにもう一つ小さな注なのですけれども、この都築さんのご本で『国家学会雑誌』について三か所ほどで触れておられます。そして、

小野塚は『国家学会雑誌』ばかりに書いていたからアカデミックで、吉野は総合雑誌の『中央公論』などに書いたから世間向けに書いたという比較対照がなされています。しかし、現在の『国家学会雑誌』と昔はだいぶ違うのです。私はこれも丸山先生に何度か聞かされた話ですけれども、丸山先生が『国家学会雑誌』に助手論文を書いた頃は、毎月一日の『朝日新聞』の、当時は一面が広告欄だったのですが、一面の右上に『国家学会雑誌』のその月の号の目次が載ったというのです。だから、純粋アカデミックな雑誌ではなくて、一種の総合雑誌としてあった。もっとさかのぼって明治になればさらにさまざまな記事が載っている。大学の人間だけではない、官僚なども読む。いろいろな人が読む総合雑誌、海外事情紹介誌でもあったということです。そもそもはじまりが伊藤博文の肝いりで、立憲政治をはじめるには国家学をやらなければいけないというところから、国家学会も『国家学会雑誌』もはじまっているわけなので、案外純粋アカデミックではなかったということは気をつけなければいけない。小野塚さんがそればかりに書いていたから、アカデミズムに立てこもっていたというのは少し違うと私は思います。

ついでに思い出したのですけれども、夏目漱石に『彼岸過迄』というあまり出来のよくない小説がありますけれども、その中には（『国家学会雑誌』に並ぶ東大法学部系の雑誌である）『法学協会雑誌』が出てきます。読みかけの「法学協会雑誌があるはずだが」などと書いてあって、あの頃の読者はそう書けばたぶんかなりの人が分かったのです。『朝日新聞』に連載の小説です。というわけで、非常に細かなことですけれども、イメージがやや変わってくるかと思いますので…。これも補足です。

山辺　さきほどの話に戻りますと、都築先生から一九八〇年代に政治学のあり方がかなり変わっていき、そしてまた渡辺先生から『日本の政治』は急速に古くなったというご指摘がありました。やはり同時期の傾向として、伏見先生のご報告の最後の部分で、一九八〇年代の日本をめぐる内外の環境変化についてご指摘いただきました。そういった政治学の対象自体が大きく変化したということもあるのかと思って伺っておりました。

最後に都築先生からお一言ございましたらぜひ頂戴したいのですが、いかがでしょうか。

都築　とてもまとめにはなりませんけれども、いま渡辺先生がおっしゃった最初の点ですね。京極先生の『日本の政治』がいま読まれるかどうかという。それは要するに日本政治文化論のようなものがともかく急速に説得力と言いますか、通用力を失ってしまったのは、九〇年代以後の日本の変貌を反映している。つまり、日本的経営のようなものがもういまや跡形もなく、終身雇用も年功序列もなくなっていますので、まっさきに、学生は本を読みませんが、そういう時代の変化は体で感じ取っていますから、講座派以来の日本政治文化論のようなものはもうまったく通用しなくなっていると思います。逆に言うと、なぜそういうものが三〇年前までは通用していたのかということも問

えると思います。その意味ではいまはまったく新しい時代で、しかしもしかするとそれももうすでに三〇年以上が経過して、この情報革命によりまた次の時代に入っているのではないかと思います。

（文責・山辺春彦）